

( 令和 3 ) 年度国立天文台研究集会開催報告書

2021年 10月 29日

国立天文台長 殿

|                         |  |                        |
|-------------------------|--|------------------------|
| 代表者                     | 氏名   | (ふりがな) すみ たかひろ<br>住 貴宏 |
|                         | 所属・職   | 大阪大学理学研究科・教授           |
|                         | 研究集会名  | 2021年度光学赤外線天文連絡会シンポジウム |
| 開催期間                    | 2021年 9月 6日 ~ 2021年 9月 9日  |                        |
| 開催場所                    | オンライン会議システムZoomによるリモート開催   |                        |
| 参加人数・国数<br>(国数は所属機関の国数) | 310人・4カ国   |                        |
| 発表資料等の情報                | <a href="http://gopira.jp/sym2021/index.html">http://gopira.jp/sym2021/index.html</a>  |                        |
|                         | 研究集会のプログラムや発表資料等をまとめたHPがあればURLを記載してください。提出後に作成された場合もご連絡ください。国立天文台研究交流委員会HPにリンクを張らせていただきます。HPではなく、論文や冊子を作成している場合は、可能であれば一部ご提供ください。(論文の場合はDOIの情報でも可)   |                        |
| 研究集会の概要                 | <p>光赤天連では毎年シンポジウムを開催し、日本の光赤外線天文学コミュニティの将来計画や大学間の連携・活性化、発展のための議論を行ってきた。2021年度は「国際大型計画との関わり方を考える」をテーマに据え、天文学・宇宙物理学の観測計画が大型化し国際計画が必須となる状況を踏まえて、現在進行中、あるいは計画立案中の国際計画を概観し、実現に至らせるためにコミュニティとして今後すべきことを議論した。また、学術会議マスタープラン2023への重点大型および大型計画の推薦に関する議論も行った。</p> <p>4日間に渡るシンポジウムは、以下の5つのセッションで構成した。1: 国際計画での経験、2: 現在進行中の国際計画、3: 将来計画(第1部: マスタープラン2023の重点大型計画への推薦、第2部: 今後のスペース計画と地上計画)、4: 一般講演、5: 総合討論。セッション1と2では、すばる、SPICA、ALMA、IceCube、KAGRA、ひので、TMT、すばるPFS、Euclid、Athena、JASMINE、Roman、Solar-C(EUVST)の各計画について、立案・建設・運用段階の様々な経験や教訓、コミュニティに対する期待等の講演があった。これらを受けて、SPICA計画への関わり方を振り返り、また、今後の国際計画の推進を見据えて、光赤外コミュニティの計画への参画のあり方について意見交換を行った。セッション3の第1部では、光赤天連から学術会議天文学・宇宙物理学分科会へ提出予定の、重点大型および大型計画の推薦の議論を行った。セッション3の第2部では、光赤外コミュニティと、宇宙科学研究所および国立天文台との双方向の情報共有と意見交換を行った。セッション4でAriel、ULTIMATE-Subaru、OISTERに関する一般講演を行った後、セッション5では、データ・アーカイブワーキング・グループ(WG)による、光赤天文観測データ・アーカイブのあり方への提言案などを議論し、最後に、シンポジウムを通して得られた、光赤天連の将来ビジョン確立へ向けての論点・課題を整理し、将来計画検討専門委員会における議論の継続を確認した。</p> |                        |

|                                 |  |
|---------------------------------|--|
| <p>研究集会の成果</p>                  | <p>以下、本シンポジウムの成果を順に述べる。セッション1、2では、光赤外波長に限定せず、多様な実施内容・規模・協力形態の計画の主導者から、国際計画推進の現場での課題やその克服の仕方、将来の計画実施への教訓等を共有いただいた。また、セッション3では、国立天文台長、宇宙科学研究所長に参加いただき、各機関での計画実施の枠組みや、予算等も含めた大型(国際)計画を取り巻く状況等を聞くことができた。これらにより、光赤外コミュニティの構成員それぞれが、改めて大型計画実施の難しさを認識するとともに、課題の抽出を行うことができた。その内容は、事前コスト評価の難しさといった、実施機関との協力が必要な具体的な項目から、長期的な人材育成(国際プロジェクトマネジメント、技術力等)まで幅広い。関連して、マスタープラン2030への推薦の議論では、様々なタイムスケールで実現を目指す10件の計画が議論の対象となったが、今後どのようにこれらの計画を実現に向けてサポートしていくのかが大きな課題であるという認識をコミュニティで共有した。また、SPICA計画の中止を受けて、戦略的中型になり得るミッションの創出の重要性も提起された。今後もこれらの議論を継続し、コミュニティが計画の推進をより実質的にサポートするための流れを作っていく必要がある。シンポジウムでは、光赤天連の将来ビジョンやスペース・地上計画のロードマップを描くことを意図して、(2030年代将来計画検討WGを定義し直す形で)新たに設置する将来計画検討専門委員会において議論を継続することを確認した。</p> <p>セッション3では、宇宙科学研究所長、国立天文台長とコミュニティとの間で、互いへの期待を述べたり(コミュニティとの対話や多様なプログラムへの支援等)、TMT推進のためのコミュニティの主体的な支援等に関し意見交換を行ったりすることができた。</p> <p>SPICA計画の推進団体として、計画初期における光赤天連での議論の仕方、宇宙科学研究所との連携、人材の育成等について意見交換を行うことができた。これらの意見は、光赤天連で設立を検討しているWGにおいて、研究者コミュニティとしてのSPICAへの関わり方の総括を行う際にも考慮される予定である。</p> <p>マスタープラン2030への重点大型・大型計画の推薦については、推薦WGおよび推薦順位検討サブWGが議論を重ね、推薦の原案を作成していた。それまでも光赤天連会員から広く意見収集は行っていたが、シンポジウムではWG以外の会員から直接の声として意見を収集でき、これらを反映させた上で、推薦書を完成させることができた。</p> <p>最後に、2020年度のシンポジウムを基礎としてデータ・アーカイブWGが作成した光赤天文観測データ・アーカイブのあり方への提言案を議論した。この提言については、シンポジウムでの意見を反映させ、9月15日の光赤天連総会での承認に至った。</p> |
| <p>その他参考となる事項<br/>(希望事項も含む)</p> | <p>新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点からオンラインのみの開催とし、予定していた旅費補助が発生しなかったため、経費は使用しなかった。</p>  |
| <p>学位取得への寄与 ※1</p>              | <p>〔本研究が博士論文執筆に寄与した数〕<br/>不明</p>   |
| <p>参加学生数 ※2</p>                 | <p>〔本研究に参加した大学院生の数〕<br/>20人弱(正確な人数は不明)</p>   |